
資料編

和白塩・石像物



当時の塩田（前方は博多湾）

藻塩焼く製塩時代

- (1) 志賀の海人の塩焼く煙風をいたみ 立ちのはのぼらず山にたなびく
- (2) 志賀の海人の一日もおかず焼く塩の からき恋をも我はするかも
- (3) 志賀の海のけぶり焼きたててやく塩の からき恋をも我もするかも
- (4) 志賀の海人の塩焼衣なれぬれど 恋とふものは忘れかねつも
- (5) 志賀の海女は藻かり塩焼き暇なみ けぶりの小櫛取りも見なくに
- (6) 志賀の海女の磯に刈りほす勿告藻の 名は告りてしを何か違い難き

以上は萬葉集に歌われた「志賀の海人」の歌である。(3)(5)は岩波写真文庫【塩の話】の中で、「この二首は石川朝臣君子の作と言われ、大変有名で当時から広く愛誦されていた様です。しかも当の石川朝臣は筑紫には一度も下って来た事はない様ですから、此等の歌は奈良の都で作られたものに違いありません。志賀の海人や、塩焼きは当時非常に有名で、恋歌等の枕言葉として使われていたのも、又当然であると考えられます」

昔の歌に歌われた『志賀の海人』は、今日でいう志賀島の志賀だけに止まらず、海の中道から奈多、和臼、香椎、多々良と続く博多湾岸一帯を指していると一般に解されている。

歌に出てくる「焼く塩」とは、どんな製塩法だったのであろうか。一般的には、海藻に海水をそそいで乾かし、その藻を焼いた塩灰を更に海水にとかし、塩分の強い海水を作り、それを煮つめて塩を作ったといわれている。これに対して九州大学の或る塩研究家は、藻塩焼くというのは次のが本当だと説明されている。

「当時は製塩用専門の土器があった。高さ20cm～30cmのトロフィ型の土器で、据える台の方が円く引こんだ凹んでいるのが特長。雁ノ巣から出土する土器が此に似ていると聞くから、私は雁ノ巣土器は志賀の海人が焼いた製塩用土器ではないかと考えている。又、当時塩焼きの最良の燃料は松ヤニの出る松で、これを焼くと炎は1m位も燃え上がる。それに製塩用土器の高さはせいぜい30cmぐらい。これでは火がもったいないので、その火をおさえて効率を高める為に、海藻をその土器の上に覆いかけていたのである。灰にして濃度を高めた等とは信じられない。太宰府時代には製塩用土器時代は既に過ぎ、石釜時代(平たい底の浅い能古石製の残っている)に入っていたのではなかろうか。萬葉和歌に『一日もおかず焼く塩...』とあるが、土器だったら一日もおかず焼く必要はあるまい。石釜だったら石を冷却させぬために一日も塩焚きを休めなかった...と考える方が理に合っている」

この雁ノ巣土器は、雁ノ巣で製塩が行われたというのではなく、製塩用土器が雁ノ巣から出土していたという意味である。又この雁ノ巣の出土土器については、実際にそこで土器が製作されていたとか、いや此処で志賀大神を祭る祭儀が昔行われていて、その際使用された祭儀用土器が放置されていた等の説があり、九大の先生の説もそれら諸説の一つと

考えられる。

1. 三苦遺跡群

「今回発掘した古代の集落跡の内容を振り返ってみよう。2間×2間の総柱建物は倉庫跡、生産遺構は工房跡と推定できる。性格は不明だが掘立柱建物やその他の柱穴も古代人の活動の場であったに違いない。製塩土器の出土は、集落内の土器製塩と結びつけられるのだろうか。このように集落の施設をあげると、海に生業を求めた人々の姿が垣間見られるようだ。だがこれは単に漁村的な集団というよりも採集と加工が制度的に組込まれたように思えてならない。臆測をお許しいただければ、海産物を塩で加工し倉庫に保管する。鍛冶工房で採集具を製作し、管理も行われていた。このように考えると、鴻臚館の時代に述べられた「贄」としての生鮮食品を貢納していた「厨戸」のイメージと重なるものがある。いまは一つの意見を提起するに止まるが、今後周辺域の開発と引替に考古学情報の増加が予想される」(以上、発掘指導の福岡市文化課の報告書より。)

実は後述の通り、この遺跡の直下は三苦水道と称し、弥生時代は博多湾と玄界灘の海水が互いに満ち引きしていた。

2. 奈多、雁ノ巣砂丘遺跡

弥生後期の土器片をはさむ「雁ノ巣砂丘遺跡」「奈多砂丘遺跡」は、海の中道遺跡から東へ約5km、荒波に洗われた砂丘の断崖面に黒ずんだ遺物の色含層がむき出しに見えることから証明できる。(「福岡の古代を掘る」の朝日新聞社編より)

3. 梅ヶ崎山遺跡

昭和59年、協栄年金ホームが梅ヶ崎山に建設される際の整地作業中に発見されたもので、その時出土した製塩用土器は同年金ホームに展示されている。

4. 海の中道遺跡調査

博多湾北海岸に点在した塩焼く煙の代表は、平成2年9月から朝日新聞社と海の中道遺跡発掘調査実行委員会が進めてきた『海の中道遺跡』の発掘で表面に出てきた製塩跡である。朝日新聞に発表された調査報告から抜粋すると、

『遺跡は奈良・平安時代、くわしくは8世紀後半から11世紀中頃まで、およそ参百年の間続いた大規模な専業漁村である。1979年から81年までの建設省の委託による発掘から数えて、今回で4回目である。遺跡の規模は海岸沿いに長さ四百米に及ぶ広大なものである。釣針、魚網用のおもり、製塩土器、製塩用の炉等々の古代製塩技術の復元について、

かなりの成果が上がった。』

「萬葉集」に「藻塩焼く」と歌われた製塩法、即ち海藻を焼いた灰を海水に溶かして濃度の高い海水を作り、その上澄みを煮詰めるという製塩法が果たして実際に行われたのか、考古学者はこれまで懐疑的であったが、愛知県松崎貝塚からウズマキゴカイなど、海藻に付着する生物の灰が多量に発見されたのに続き、海の中道でも同様な発見があったので、古代に「藻塩焼製塩法」が広く行われていた事は確実となった。又、海の中道では、塩を煮詰める容器として、土器のかわりに滑石製石鍋を使った時期のあることも分かってきた。



さらに朝日新聞社が発表した報告書の中に「萬葉集にその光景が詠まれながら考古学会では異端視されてきた、海藻を焼いて塩を作り『藻塩焼き』が古代に実際に行われていた事を示す遺物も、貝塚から大量に出土している。そこで発掘現場そばで海藻くずや燃料の



朝日新聞「福岡の古代を掘る」より

マツボックリを拾い集めるなど、昔の製塩状況を再現し、『古代の塩づくり』に挑戦し、見事に成功した。同委員会は、九州での塩づくりは古墳時代前期からとされてきたのを、約600年も逆上って弥生時代前期から始めていたと推定し、古代製塩史に新たなページを書き加えた...云々」

黒田藩政以前

奈多の『塩売弥太郎』物語

奈多に「塩売弥太郎」の話が残されている。

立花城主 大友道載（鑑載か？）はその最愛の妻 桂子をなくし、憂々たる日々を送っていました。或る日、家臣の鞆形市郎次が不思議なことに、亡くなった奥方 桂子と顔形ち、

年令もそっくりで、名前も桂という美人妻が奈多に居る事を発見した。これが塩売り弥太郎の妻だった。驚いた鞆形は早速この事を城主に報告した。

数日後、弥太郎の妻は忽然と姿を消した。狂ったようになった弥太郎が、また何日かたった後、もとのように籠を荷負って塩売りに行く姿が見られるようになった。新宮の下府、上府、立花の村々に「塩っぼう、塩っぼう…」と、弥太郎の声が流れていたが、実際は懸命に居なくなった妻の姿を追い求めているのだった。

そうした或る日、宗像大宮司の家来 鳥羽助四郎が弥太郎を尋ねて来て、「私は宗像大宮司氏貞の家臣、主命で立花城に密偵として潜入中、敵に発見され危ういところをあなたの妻君に救われた。あなたの妻君は今、立花城におられます…」と聞かされる。

弥太郎は一時宗像方に身を隠し、立花城主の奈多海岸での宴会の機会をねらい、宗像勢の協力を得て、ようやく妻を奪い返すが、桂は『心は汚れておりませぬ。然し体がけがれております、どうか御許しを！』と走り行く舟の中から玄海灘に飛び込んで死ぬ…。

この物語は今から450年位前の話だが、当時和臼の浜辺で焚かれた塩がかなりあったことを物語っている。

すでに「藻塩焼く」の時代ではなく、石と泥土で作った竈で鉄鍋に海水を入れて焚いていたものと思われる。こうした製塩の遺跡が「焼け石」や「焼け土」として残っている。以下の場所では戦後しばらくまで焼け石が見られた。(旧「字名」、藩政以後のものも含む)

上和臼地区………汐入、浜久保、古賀堀、浜田、唐尾

下和臼地区………田開、蒲池開、唐尾、古塩浜

三苦地区………西浜、塩田、東浜、光畝町

奈多・塩浜地区…塩取浜、一の開、二の開

黒田藩政以後

黒田藩政時代になると製塩法も大分進歩し、海岸の一部を堤防でせき止め、内側に海水を導入、それを井戸式の溝にため、蒸発させて濃塩水を作る方法から、広い塩田いっぱいには砂をまいたりかき集めたりして濃い塩水を作る、所謂『揚浜式塩田』へと改良大規模化されてゆく。

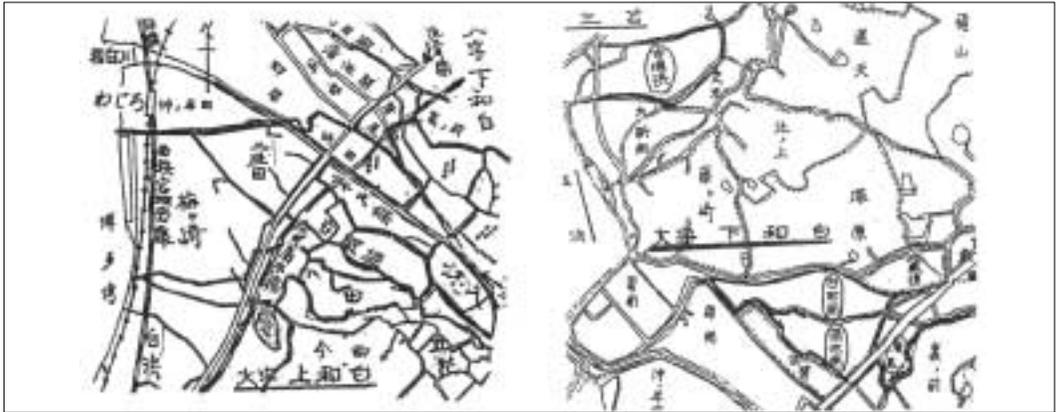
上和臼地区の塩田

上和臼地区内でも製塩業が行われていたらしく、和臼川の河口から約700m、JR鹿児島本線を越えたあたりから上流、川の周辺に「浜田、浜久保、古賀堀、汐入」の水田内に多数、塩釜に使われた焼石を発見することができる。

下和臼地区の塩田

和臼ヶ丘町内の(古田開、蒲池開、唐尾)相ノ浦集落附近(和臼六丁目)の(古塩浜)

地区は、奈多浜の築堤による大規模塩田工事着工のころまでは、製塩が続けられていたものと考えられる。



元禄初年ごろの上和白・下和白村の塩田跡

三苦地区の塩田

『続風土記』によると、黒田長政が粕屋、志摩、早良の諸郡に塩田を開くとあり、その時の塩田として三苦、湊、浦、泊、太郎丸、桑原、元岡、野北、芥屋、姫島、馬場、青木、姪ノ浜が挙げられている。更に、黒田長政公入国以来、約130年「寛保元年（1741年）三苦村干潟に土手を築き、新田を作することを許可す」の文書がある。塩田変じて田畑となりつつあることがわかる。

元禄築堤による塩田

大野忠左門貞勝の築堤

元禄築堤と称しているのは、今日JR香椎線に沿ってその南側を走っている道路で、通称「沖の土堤」と呼んでいる。この元禄築堤の考案施工の責任者が大野忠左門貞勝である。

この工事はすべて公費を以てし、村民に苦役を課せず、故に遠近より人夫多く集り、たちまちにして成就した。

元禄2年（1689年）、永年浦奉行として懈怠なく勤めた大野



元禄築堤（1703年）後の塩田・新田絵図

忠左衛門貞勝は、更にその手腕を認められ、藩の財政を司る裏伴役に抜擢され、元禄16年(1703年)裏糟屋郡奈多浜の干潟を開拓して塩田並びに田畑にした。この塩田の守護神として、宝永3年(1706年)海浜に龍王の祠を建てて海神を祀った。5年後の宝永8年、元禄築堤による製塩の成功を感謝し、龍王祠に「六歌仙」を奉納した。この六歌仙は今も四社神社に大切に保管されているが、それには次のように誌されている。

讃 日野中納言資茂卿

尽 衣笠守 守高

宝永八年卯年卯月吉日 前権職 大野氏 貞勝

『福岡藩郡役所記録』宝永元年2月6日(1704年)

『裏粕屋郡和白潟後の新田 塩浜を田に振替え申し付けた反別を決め候事

裏粕屋郡和白潟塩役所後の新田 今後塩浜を振り替えて開に仕り度い由 大野忠左衛門
詮議の上申し聞き候

右一作地床不定に付き 年々秋反別に候 凡そ三ヶ年の反別相極候処 六升余に相当り
候 今後塩浜に申付に依り定め反別相究め候

畝数反別覚。

一、田数 貳町六反壹畝貳歩 下和白村御支配。

一、田数 貳町六反九畝四歩 三苦村御支配。

定反別 壹斗代

合田数五町三反六歩

徳米五石四斗六升二合 口に芳二

右之通相極め 徳米年々塩方より御郡方へ相納め 一作米の御年貢に上納仕る可き事』

大野貞勝は元禄築堤による塩田工事を進めると共に、このために製塩不可能になった下和白、三苦地区の塩田を農耕田へと改作事業も併行して実施した。

塩浜集落の誕生

「福岡県地理全誌」に『福岡藩の権臣大野忠左衛門貞勝 下和白 三苦両村の海浜に廣き斤地ありしを 藩財を用いて海浜三十町歩を開く 後年改めて新田となす 因りて一村を立て塩浜と名付く』とあり、宝永元年(1704年)には塩浜集落が誕生した。

また、久保田市右衛門氏(故人)は次のように話しておられた。

「塩取りを研究されていた久保田兄弟が塩質の良い博多湾を選び、日当たりの良い場所に住居を一軒構えました。しかし、そこは夏は南風が激しく塩焚きには向かない、仕方なく少々遠いが唐尾に塩焚き小舎を建てられました」

塩焚きを決意した久保田兄弟は、唐尾に小屋を建て製塩を始めた。そのうち「大砲道」(塩浜～和白小学校前道路)が1658年に1～2年かけての大工事で完成した。その道路用

土砂が勝ヶ崎南端の崖を潰して採土され、かなりの平地が出来た。その渚の景勝の平地を整地して久保田兄弟の家が二軒できた。1660年頃のことであった。

久保田與三左衛門

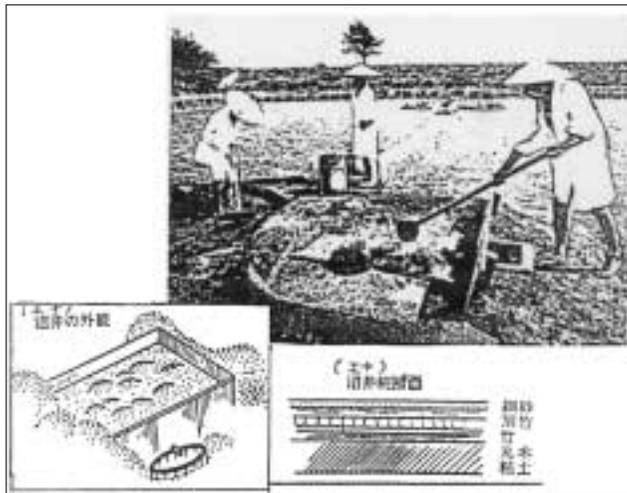
塩浜民話「與三兵衛はドンギラギン」の主人公、與三左衛門（通称與惣兵衛）さんは、元禄9年（1696年）に死去、丁度そのころ奈多浜の元禄築堤の大工事とそれに伴う堤防内側干拓の大作業が、各地から多勢の人夫を集めて進行中であった。元禄堤防用の土砂も勝ヶ崎の海岸の崖の土砂が使われた。既に久保田兄弟の住居が建てられていたが、久保田秀男氏邸の庭の井戸は水清く水量も豊富だったので、この井戸を中心に多勢の人夫達の小屋もでき、現在の塩浜集落の基盤が作られていった。

この塩取浜での製塩を末信留吉氏（故人）は明治初期の思い出として次のように話しておられた。

「塩取浜の塩田は、塩田の中に直径2間（約4m）ぐらいの丸い井戸が掘ってあり、エナと呼んでいた。その周囲に引いてある溝から潮水がエナに溜まる。このエナの海水を桶



与三兵衛氏墓標



にくみ上げて、肩にになって塩田一面に撒水していた。この塩取浜の塩汲みは中々の重労働だった云々...」

お話のように、この絵図ではエナ（沼井）は丸い井戸状ではなく箱型のものである。エナの外觀と縦断面のようである。エナの外觀と縦断面で、汲み込まれた塩水が強い日光によって濃度の濃い塩水となって、横のクダから流れ落ちる姿がよくわかる。

最後の塩田開発事業、奈多塩浜築堤工事

1) 嘉永2年（1850年）

この年は、大雨大洪水のため元禄築堤（沖の土堤）は数箇所決潰し、塩田、田畑は荒廃する大騒ぎとなった。古老の言い伝えによると、「憐れむべし当年の塩浜を無防備の潟州とし、荒天一度襲来せんか、海水奔騰して田畑を浸し、そのいたましい被害の実況は、想い起す元禄以前の惨状のようで、人々は互いに海を眺め悄然たるばかりであった...云々」

という有様であった。

2) 嘉永3年(1851年)

当時奈多、唐原、和白三ヶ村遠干潟地を拝領していた矢野六太夫は、この際この沖に更に突き出して一大築堤をし、塩田を拡張した方が有利と判断し、藩に願い出て許可を得た。矢野氏は松本平内に工事責任者になってくれるよう依頼した。松本平内は藩の御咎めを受けて隠居身であったが、六太夫の切なる願望により陰の力となって協力する事になった。



三苦の塩田まで博多湾岸より約1500m、海拔は1.8m、下和白の唐原まで約700m、海拔は2.8m、大風高潮あれば、旧和白町の田畑が水面下になる

設計実施の請負人には、周防楯浜の村武甚左衛門と塩屋喜久蔵が選ばれ、楯浜から和八という専門家が和白の現場へやって来て、詳細な見積りを始める等、計画も具体化した。

3) 嘉永4年(1852年)

新春早々着工の計画であったが、黒船騒動で矢野六太夫が長崎出張、藩財政がいよいよ窮乏して工事まで手が延びなかったのか、遂にこの年は着工出来ないまま越年した。

4) 嘉永5年(1853年)

元禄築堤も完全補修されず、新しい沖への堤防も手のつかない状況のまま、再び大風高潮が襲来、奈多～下和白の元禄築堤は徹底的な大破損を蒙った。「その海水の及ぶ所は、遙かに下和白、三苦の田畑を浸し、折角作り立てた作物は一望漠々、見渡す限り焦茶の田園と化し、人々は草木の根をかじり、或いは立花村あたりまで米や野菜を借りに行く有様であった...云々」と伝えられている。

不思議なのは、これ程の惨事があり、而も沖の築堤計画中だった矢野六太夫の名前が全く出てこなくなった事である。或いは矢野が藩政多忙で直接自分がたずさわれないため、工事の責任者を郡奉行に依頼したのかも知れない。この矢野六太夫に替って登場してくるのが、粕屋、宗像両郡の郡奉行をしていた肥塚次郎右衛門と云う人物である。肥塚も矢野六太夫が依頼した松本平内の沖の土堤築造計画は知っていたので、早速、松本平内を訪ね、協力を懇請した。平内の覚書の中には次のように書かれている。

『肥塚次郎右衛門の依頼によって奈多新開築立にかかる 身分柄 固辞いたしたく候ども 其辺は屹度道を開き可被申に付 安心いたし かかり候様談有之.....云々』

5) 嘉永6年(1854年) 奈多塩浜築堤開始

藩財政の窮乏を知っている平内は財源を民間に求め、藩の御用商人である大山忠平氏に

協力を求めた。大山氏は石橋七蔵、藤崎貞次の両氏に計画を相談し、博多の三豪商が資金協力する事で話がまとまった。かくして「築堤願書」は、御勘定奉行生田吉右衛門、財事元締小河専太夫を通じて、立花弾正の裏印を得て許可された。



newly established Naikō Dam site, Chief Engineer Wada Monbuemon, Yamada Sasakiemon

嘉永六年奈多新開築堤に当り、只今の雁ノ巣宝塚の地に仮に役所を置いた事のわかる地図

その他の役人が任命され、松本平内の組内として、着工の部署手配が完了したのは4月12日だったと云われている。

6) 安政2年(1855年)

一の浜(一の開)の第一期工事(雁ノ巣~塩浜船通し)も完成に近づいて、内側の塩窯施設も進捗していった。工事の総監督 松本平内は、前借米御指紙仕組失敗後、隠居を仰せつかっていたが、この年御咎め御免となった。奈多築堤の大工事が成功裡に進捗していた事も大きな理由であったに違いない。(ちなみに松本平内氏は、現在北九州市戸畑区の素封家、松本健次郎氏の曾祖父に当り、安川男爵家の裏表といわれる)

第一期工事は8月中旬完工し、内側には20町歩の塩田と11釜ほどの塩焼釜も完成した。これにより第二期工事(塩浜船通~和白川)も12月より着工された。

7) 安政3年(1856年)

予想以上の成功に喜んだ藩側から第三期工事(和白川~槇の鼻=今の片男佐)の計画が持ち上がった。しかし数ヶ月に及ぶ大阪その他各地での大山忠平の金策は困難をきわめ、第三期工事の夢は消え去った。安政2年に始まった第二期工事は、資金難の中にも営々と続けられた。この頃の工事の模様を、高浜の浜崎百松氏(故人)は次のように話された。

『堤防工事には坪当り六十人ぐらいで請負い、郡内全域から農民達が人夫として狩り出されていた。堤防用の土は片男佐の槇の鼻を崩して舟で運び、石は遠く糸島から運ばれました。当時の石屋さん達は、前方の下の方、郷部小屋と呼ばれていた小舎を作って住んでいたが、その中には奈多から嫁さんをもらって住み着いた人もいました。』

8) 安政4年(1857年)

新開築堤の推進力の中心だった大山忠平が、3月12日、その生命を打ち込んだ干拓事業の途中で亡くなった。資金の大黒柱の死去と、今後どのくらい資金が必要か、その前途に不安を感じたのか、或は大山忠平と同様に、家族親戚一同の猛反対に恐れをなしたのか、

恐らくそれら総てが原因で、資金柱の一人、菊野屋貞次も手を引いたらしい。残るは松本平内と鳥羽屋七藏。こうした中に工事は着々と進められて行った。

9) 安政5年(1858年)

新開築堤の総監督 松本平内は、その後再び藩の財政担当官として重要視されたが、安政4年ころより病状思わしくなく、7月に大阪から帰国すると間もなく病床につき、同27日遂に71歳でその多端の生涯を閉じた。

次々と柱を失った新開築堤工事は、最後に残った鳥羽屋七藏を中心として営々と進められ、無事「塩浜船通し～和白川の間」350間の第二期工事を、この年の暮れ近く完成する事が出来た。朝日新聞の記者、永島節郎氏は「博多と福岡」と言う本に、次のように書かれている。

『堤上巾三間乃至四間。堤下基盤十四～十五間。高さ一間半乃至二間の築堤が、外面を堅固な石垣として延々千三百五十間、或は二十三町(土木管区の調査実測によると千三百七十七間半=筆者注)三ツの屈折を描いている壯観は……これを対岸の槇の鼻から遠望すれば、或は小さい万里の長城か、或は在りし日の元寇防塁の再現か、兎にも角にも偉観四隣を押し……それはただに当時の人々の目を驚かしたばかりでなく、今日何人かその大工事、大構築に―見驚異の目を開かない者があるであろうか。蓋し幕末随一、否福岡藩有数の一大工営であらねばならぬ……』

こうして新開大築堤は、嘉永6年4月着工以来、幾多の災害困難と戦い乍ら、六年という歲月苦楽の積み重ねを経て年末に竣工した。

10) 安政6年(1859年)

この年の年頭に、藩庁から次のような褒詞が最後まで頑張った鳥羽屋に下された。

鳥羽屋七藏

金 千五百六拾兩

裏粕屋郡奈多、塩浜、下和白、三ヶ村抱洲開汐除土手 先年大風雨 にて及大破候に付同所地先瀉塩浜新開仕整申付置候処 入用金之右之通り出金致し 外側築立相濟御開にも取掛り 格別精出し候段 奇特之至り 及御沙汰候 依而格別以て俸代迄五人扶持被下候 猶又速に致成成就候様出精可致行事

未正月

その後の事について、前記永島節郎氏は同書の中で、次のように書いている。

『かくて築堤は出来あがった、築堤が出来上ると、築堤内の一大整地が行われ、ここに水路を特設した新しい塩田ができ、さきに中国、九州からやって来て築堤工事に働いた人々は、安政六年二月、全事業の完成と共に互に懷を豊かにして郷里に帰郷したが、帰れない人々は新居を構え、多望なる奈多、塩浜に塩を焼たり、甘藷を作ったりして土着し

たいという事で、この千三百五十間の築堤内には、当時既に二十町歩の埋地が出来、日に月に塩窠の数も加わり、二ヶ所に開かれた船入れには荷役船は勿論、多数の漁船も出入して、永年波浪浸害に悩み抜いた和白、塩浜、奈多の三ヶ村も始めて安堵の喜び、生活の潤いを神に感謝したに違いない……』

この10月藩庁は再び褒詞を、最後まで出精尽力した鳥羽屋七藏に下された。

鳥羽屋七藏

裏粕屋郡奈多、塩浜両村抱塩浜開立に付 追々余分の出銀等致居り候段相達候 此節 依頼右塩浜其方受持分被召上候 依之別段の以御詮儀俣代迄被下置候五人扶持 永代被下 苗字名乗候儀 指免猶又御 料理頂戴申付候事

十月

以上で築堤大工事は無事完了、製塩は藩営とされた。この塩田の塩は非常にきめ細かく『和白塩』と呼ばれ藩財政に大きな貢献をした。この新しい塩田は、元禄築堤により出来た「塩取浜」の製塩法とは異なり、末信留吉氏（故人）の話によると『一の開の塩浜分は立派な塩田で、三ッ並び毎に低い堤防で仕切られていた。その各ブロック毎に一間から一間半くらいの浅い引溝が引いてあり、その溝から潮水を柄杓で汲んでは塩田に撒布し、濃度の高い潮水をとるようにしてあった。それで井戸式の潮取浜の塩田に比べると、作業は非常に楽だった』という事であった。

11) 慶応2年(1866年)

新開築堤によって新しく「一の開」「二の開」が開発され、二ヶ所で製塩作業が開始されたが、第二期工事で出来た「二の開」塩田は塩つきが悪く、この年遂に廃止され畑作へと転向していった。

12) 明治13年(1880年)頃

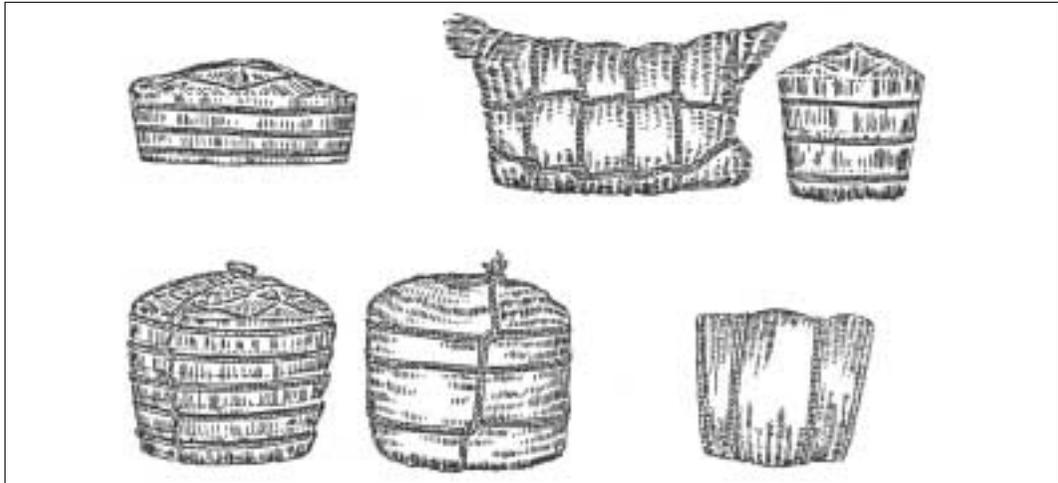
このころが和白塩の全盛期だった。当時の記録によると塩田面積9町6反、内訳は「一の開」が5町8反、塩取浜が3町8反ばかりであった。この両塩田の塩を焚いた釜跡には、最近まで石炭の焚きかすが黒く砂土と混合して、一種独特の地域を造成して残されていた。

製塩作業は大体田植えがすんでから始まり、10月一杯ぐらいで終わったようである。冬は塩の付きが悪いので休業していたと伝えられている。

出来た和白塩はかます吠に入れた。この塩吠は塩をつめ込むと高さ30cm、巾が40cm四方くらい。これを梅の花型に荒縄でしばった。塩吠には何も印は書かなかったが、梅花型の塩吠が、良質塩として有名な『和白塩』のトレードマークとなっていた。

和白塩の吠は小型だったので、これを編む材料の稲藁も、出来の良い山つきの長い藁は不向きで、秋落地帯の塩浜の短い藁が適していた。或いは塩浜には短い稲藁しか出来なかったのも、小型の塩吠しか作られなかったというのが本当かもしれない。しかしながら、

この小型梅花型が優良塩のトレードマークだった事は事実である。



塩俵の様々な包装（大日本塩業全書より）

13) カネン手波止場

カネン手波止場とは、「元禄築堤」和白駅から奈多団地へと走る畑添いの道で、丁度中央部で「く」の字型に曲り、五丁川樋門となっている「新開築堤記念碑」が建っているあたり。奈多団地から来ると、樋門橋を越え、ぐるっと和白方向へ向う道路の右側一帯は、海水が入り込んで船を引上げて泊らせる入江になっていた。

このカネン手波止場について、浜崎百松氏（故人）は次のように話しておられた。

『この新開築堤が出来た時、この波止場が作られた。ここが和白と博多を結ぶ最高の舟着場、今で言えば交通センターか駅みたいになりました。以前は奈多の宝塚から積出されていた貢納米や和白塩も、次第に便利の良いこのカネン手波止場へ移るようになり、ここに大きな倉庫や酒屋、この外二、三軒の家があった。その酒屋は阿部勘兵衛さんといった。

明治七年の地租改正で租税が現物納から金納制になり、裏糟屋郡の米が集らなくなって貢米を運んで来る人々も来なくなり、次第にさびれていった。酒屋さんも今の福岡市の消防署支所附近へ引越して行き、昔の賑やかさは消えた。店がまだ盛なころは近くの塩田で裸体に赤ベコ姿で塩取り水作業をしていた塩浜の人達が、赤鬼のように陽にやけて、この酒屋へ来て「角打ち」しとんだったが、仕事も激しかったろうが、酒も仲々盛んで、酒店も大繁昌だった云々……』

14) 明治34年（1901年）

この年、博多湾鉄道（今のJR香椎線）が塩取浜の塩田の真中を通ることになり、用地買収問題が起こった。塩田の真中を、真っ二つに横断されては大変だと大問題となった。しかし、お上に弱く且つ純朴な、当時の農村人、結局は線路の南側に、塩焚用の巾一間の道路を鉄道側で作るという条件で妥結した。

これで塩取浜は線路の北側は塩田として利用できなくなった。



15) 明治42年(1909年)

塩が専売制となり、政府は不良塩田の取り潰し、優良塩田の助成を行うこととなり、この年、当時熊本専売局長官だった浜口雄幸(後の有名なライオン首相)が、調査のため塩浜に来村した。

その結果、塩浜の塩田は規模が小さく、引合わないとして廃止される事となった。そして翌43年9月を以て、製塩作業は廃止された。

当時の塩田面積は7町8反、年産額1,193石だったと伝えられている。

こうして、二千年に近い歴史をもつ、志賀ノ浦、奈多、三苦、塩浜、上下和白の製塩の歴史は終りをつげた。

参考文献

大山文書(大山家より福岡市博物館へ寄贈された文書)

- (1) 由緒書(2) 上坂日記(3) 鋤初之式(4) 御新開手形紙申受摺立一切員数改手控
- (5) 奈多浦出方日記(6) 土手繕普請入目覚日記(7) 大阪行銀談不調帰国御届手控
- (8) 奈多浜築堤図(9) 新開諸品買上値段高下口と掛合状
- (10) 奈多塩浜築堤に関する書状(11) 奈多塩浜堤に関し口達控
- (12) 御新開御手形御改御判申受ル為メ指出候証拠之事
- (13) 請取(預手形九千七百枚)(14) 奈多新開築堤秘話(15) 奈多新開築堤手形

ふるさとの石像物

旧上和白地区

(現在の和白1、2、3、4丁目 和白東1、2丁目 高美台)

1) 弥勒菩薩(和白東 岩崎 巖氏邸内)

筑前国風土記拾遺に『弥勒堂村西に在り ミロク田という田字有り』と書かれている。昔、明覚寺にお預けしてあったが、岩崎家の人々が次々と原因不明の病気になるので、ご祈祷して頂いたところ「もとの所へ帰りたい」とのお告げがあり。昭和26年ミロク様を明覚寺より頂いてきて、もとの場所より4m程南に御堂を移築し、7月23日を例祭として、お祀りしているとのこと。糟屋郡北部新四国千人参り「番外」の札所。



弥勒菩薩の御堂

2) 地藏堂(小金丸 清邸内)

昔は小金丸三六氏との邸境に祀られていたが、今は小金丸清邸内入口右側。「たちえ地藏菩薩」「延命地藏菩薩」「ひざり地藏菩薩」の三体が祀られている。毎年7月24日、近所の人々が集まって、お祭りをされている由。糟屋郡北部新四国千人参り「番外」の札所。

3) 小型の五輪の石塔(上和白明覚寺内庭)

西暦1500年頃の石像と推定されるも不明。筑前国続風土記拾遺に『永禄十年(1567年)九月八日 怒留湯入道 和白の山上に宿陣せしことあり その地定かならず 今 向村(公民館のある地区)の前なる田字を陣造りという この遺名にや そこに立花井とて出水有り 里民いう 昔 立花の出城有りし時 陣用に汲みせし泉なりといえり 側の畠中に五重の石塔あり 由来不詳』とある。



明覚寺内庭の五輪の塔

4) 白川稲荷社

「汐井路」を東に進むと右手に「白川稲荷」の鳥居が見える。石段を登ると、小高い丘の上に御手洗家がある。同家は

「黒田藩の財政を支えてきた博多の豪商、禁制の貿易が発覚して、一族全部が処刑された伊藤小左衛門（1667年）」ゆかりの家。御手洗正行氏によれば、昭和14年頃、小左衛門の霊を静かにお祀りしたいと母が言い、此处に移って白川稲荷様をお祀りしているとの事。



御手洗氏邸内の稲荷社

5) 薬師堂境内（字薬師ヶ浦）

「お汐井路」の最奥、小径を少し上がると左側に小さい溜池が沈んでいる。昔から雪が降って他の溜池等が凍っても、ここだけは一度も凍った事がない。村人達は此の地域を「湯の浦」と呼んで来たという。

続風土記付録に「薬師谷に温泉址という古池が、側に薬師堂が、カタハラに貴船社、中和白に観音堂がある...」と記す。

・薬師堂 本尊薬師如来像、1700年頃からと推察される。左下に手洗鉢『安永六酉（1777年）四月吉日 当村若者中』と刻書あり。粕屋郡北部新四国千人参り76番札所。

・地藏堂 当初、船越 博氏の屋敷裏三叉路の竹林の中にあっただが、大正14年頃、薬師堂の左側に移された。昭和初年頃までは、薬師様と共々上和白全村でお祭りを行って来たが、現在では毎年7月28日、上和白上組、下組で「お籠り」をして祭っている由。

・一字一石の塔 薬師堂の傍らに横たわる石塔。表面に『奉納大乘一字一石塔、安永三甲午年八月吉祥日』、裏面に『法命還山自休居士謹拝寫 俗名 当村住安河内孫右衛』と刻書がある。高さ120cm程の丸型の自然石。



薬師堂境内に安置のお地藏様

6) 大神神社境内石像（高美台二丁目）

・庚申尊天（左） 自然石に享保三年（1718年）の刻書があり「お汐井路」と明覚寺に通ずる三叉路に、貴船神社と共に鎮座されていたが、大正14年、県の指導により、貴船社と共に現在地へ移し祀らる。

・庚申塔（中央） 『享和三年八月吉日（1803



大神神社境内の庚申様

年)中和白若者中』との刻書あり。当初は中和白(和白東二丁目)の集落の東端に「明治43年11月建之」の「日清、日露戦役記念碑」と共に鎮座されていたのを、庚申尊天と共に移し祀られた。

・庚申登(右) 享保三年(1718年)八月吉日の刻書あり。庚申尊天と同様の経曆の塔であろう。



安河内八郎氏旧邸内の幸神天

7) 幸神天(安河内八郎氏邸跡)

中和白山道 下和白の大神神社 殿様道 字高見、宮ノ前を径由して(平山、下原の昔の参勤交代路)に通じる三道の三叉路に当たる要地に鎮座。『寛政十二年庚申(1800年)十月若者連中』の刻書がある。

8) 六地藏(安河内勝男氏邸)

安河内卯蔵氏(故人)の話では、「1850年頃、上和白のあぜ道で苦しんでいた修行僧を、祖先が家へ連れ帰り看病した。その僧が『此の付近に祀ってある観音様のサワリらしい。付近の観音様を手厚く祀ってください』と哀願した。驚いた私の先祖は方々の観音様、お地藏様、字「古賀堀」にあったおしせ地藏様など6体の石仏様を集め、安河内家墓地の入口に御堂を建ててお祀りした」という。



安河内勝男氏邸内安置の六地藏

9) 観音堂(安河内 亮氏邸斜め上の山)

和白東二丁目19番、中和白住宅地裏山の展望説競の高台にある。続風土記付録に「ナカワジロに観音堂がある」と記されていることから、1750年頃にはあったものと思われる。御堂前には天保13年(1842年)奉寄進の石灯籠がある。

10) 康神霊(安河内 亮氏邸横)

御堂敷は明覚寺の所有で、「康神霊」と珪化木に記されている。

11) 庚申尊天 (安河内鹿良氏邸内)

上和白から中和白への入口『大木戸』と称する三叉路から現在地に移された。「寛延三庚午年(1750年)三月中七日」の刻書がある。傍らに「明治四十年三月康河内邑次郎建立」とあることから当初の路傍から移されたことを物語る。



安河内鹿良氏邸内の庚申天

旧下和白地区

12) 塞(さや)の神(福岡工業大学前)

福岡工業大学グラウンド側の小丘の上にある。平家方にその人ありと知られた悪七兵衛景清の娘、人丸姫を祀る。姫は自分の性の苦しみから父である景清に首をはねられたために、花柳病、陰茎に悩む人の祈願をかなえてくださるといふ。



福工大前の塞の神

13) 久保田與三左衛門墓碑(長楽山 円相寺境内)

塩炊きと狸の話「與三兵衛はドンギラギン」の主人公。当初は下和白墓地にあったが美和台団地造成にあたり、円相寺裏へ移された。

14) 不動尊像2体(長楽山 円相寺境内)

昭和56年に始まった美和台団地の拡張工事で発見され、円相寺へ移された。どちらも痛みがひどく、一体に僅かに元禄とおぼしき「元」の一字が残る。

15) 円相寺境内石仏(長楽山 円相寺境内)

・弘法太子堂 糟屋郡北部千人参り「奥の院」、堂内には地藏尊と弘法大師蔵が安置されている。

・観音像2体 旧相ノ浦墓地「太田武墓地」の向かって右側にあったが、美和台団地造成の折に移された。小型の弘法大師像と観音像。

・安貞大徳墓碑 円相寺二代目住職安貞和尚の墓碑。天和～貞亨の頃。



円相寺内の大師像と観音像

16) 安河内 元氏邸内3仏

- ・不動明王像 元禄11年(1698年)の建立、昔はこの不動様の前で子供達の「夏祭り」が行われた由。
- ・阿弥陀如来像 大正元年(1912年)に安置された。
- ・薬師如来像 大正7年糟屋郡の野より移された。糟屋北部千人参り40番札所。



安河内元氏邸内の薬師如来像

17) 地藏尊像(字地藏後)

和白丘二丁目、県道26号線沿いに寛政年間(1798年頃)と思われる数体の地藏尊像がある。所謂「殿様道」に面し、昔は「六地藏」と称せられていたという。字名「地藏後」と呼ばれるほど有名であったらしい。



字地藏後の地藏尊像

18) 庚申天塔(安河内昭氏邸南三叉路)

和白丘中学東南方、正徳4年甲午(1714年)の刻書あり。当時は病魔、病鬼を追い払い、道行の安全を祈るため、黒田藩が集落の入口等に道祖神建立を奨励していた。



和白丘中東南の庚申天塔

19) 入定塚(長楽山 円相寺境内)

和白丘三丁目付近にあったが住宅開発によって円相寺に移された。土地の人は「せいぞう様」と呼ぶ石像。約150年ほど前、修行僧が即身成仏されたという。



太田 武氏邸裏手の観音堂

20) 相ノ浦の石仏と観音堂(相ノ浦)

- ・相ノ浦前三叉路「庚申天」
- ・観音堂 太田 武氏邸の裏手。堂内中央に大師像(元禄期?)、左に観音菩薩、右に三体の座像。大師像以外は明治中期のもの。糟屋郡北部新四国千人参り77番札所。
- ・波切不動尊蔵 観音堂の右側にあり、彫字は読めない。
- ・長楽寺 吉松誉安貞大徳墓標 波切不動尊碑の前。年月ははっきり見えないが、貞亨年間(1685年頃)正月。



太田 武氏邸裏手の観音堂

21) 大師堂 (和白駅前)

和白駅前通りにあり、糟屋北部千人参り78番札所。大正12年6月吉日の記載あり。「弘法大師」「十一面観世音像」「不動明王」が並んで配置されている。



和白駅前的大師堂

塩浜地区

22) 観音堂 (塩浜西の入口)

塩浜 (学校道) 西側入口にあり、糟屋北部千人参り72番札所。観世音菩薩、弘法大師 (安永8年、1779年) 地蔵菩薩、薬師如来の四仏が祀られている。毎年、高浜の「上野上人」を招き、5月8日に「観音様祭り」、7月23日には「祇園祭」として地蔵尊祭りを公民館で行っている。



塩浜 観音堂

23) 鞆の神 (久保田為雄氏邸内)

通称「勝ヶ崎」の鼻先に祀られていた。勝ヶ崎の名は神功皇后の三韓征伐以来、この鞆の神に詣れば戦に勝つとの言い伝えから起こったという。1600年頃より以前に祀られたものと思われる。



久保田為雄氏邸内の鞆の神

24) 庚申塔 (四社神社境内)

宝暦7年 (1757年) と刻書されている。塩浜の氏神である四社神社御遷宮祭を機に現在地へ移された。

25) 龍王祠 (四社神社境内)

塩地守護のために宝永三年 (1707年) に建立された。当初字「白浜」にあり、年1回の日籠りが行われ、子供相撲を奉納していたが、昭和3年に現在地へ移された。大野貞勝が奉納した「六歌仙」は今も大切に保存されている。。



四社神社内の龍王祠

26) 波切不動尊 (「一の開」築堤)

慶応2年 (1866年) 4月。新開字「一の開」築堤上にあり、かつては築堤の安全を祈願して、奈多高浜「清林」さんを招いて盛大に日籠りが行われていた。

三苦地区

27) 正覚坊石碑 (堺 憲一氏邸角)

堺 憲一氏邸東北隅三叉路に面し、寛文9年(1669年)11月の刻書がある。宝満山の修行僧「正覚坊」の石碑と伝えられる。

28) 庚申天 (堺 純太郎邸三叉路)

三苦中央部三叉路にあり、寛政9年(1797年)正月の刻書。

29) 青面金剛石碑 (永吉政昭氏邸三叉路)

三苦旧貫線道路中央付近三叉路にあり、享保2年(1717)丁酉8月13日の刻書。

30) 観音堂 (購買店前四叉路)

三苦購買店前にあり、観音尊像3体が祀られている。



三苦購買店前の観音堂

31) 三苦大師堂 青面金剛石像 (永吉政昭氏邸裏)

旧般若寺跡と伝えられる。大師堂は1720年頃の建立と伝えられるが、当時は三苦の第一号貫線道路の三苦への入口にあたり、村の北入口を守護される石仏であった。昔はここに大樹があり、昼尚暗く、夜独りで歩くと「馬の脚が下がってくる」といわれた。



永吉政昭氏邸裏の青面金剛石像

32) 森の屋敷稲荷社 (字高田)

三苦字高田、通称「森の屋敷」にあり、豊漁祈願と紛失したものが出てくるというので参拝する人も多かったという。

33) 綿津見神社境内3仏

- ・庚申天 文化13年(1816年)4月吉日の刻書
- ・庚申天 文化10年(1813年)の刻書
- ・庚申塚 天文14年(1545年)の刻書。和白地区で2番目に古い庚申塚。



森の屋敷稲荷社

34) 綿津見神社境内2神

・若宮様 コンクリートの小祠に鎮座。祭神は仁徳天皇で農耕の神。

・三宝大荒神碑 若宮様の隣に祀られる。竈の神。



綿津見神社境内の若宮様

35) 黒津神社 (綿津見神社境内)

磨き石の小祠に鎮座。祭神は「武内宿彌」。久山町山田にある「黒男神社」と同一神で希有の神社。

36) 須賀神社 (綿津見神社境内)

磨き石の小祠に鎮座。日本地名大辞典に「ヤマノカミにある舞神社(祇園)では、奈多の三郎天神(志式神社)に神技を奉納する神官が、同社で舞楽を奏した後、三郎天神へ行った」と記してある。この舞神社が須賀神社のこと。

37) 虚空蔵菩薩 (綿津見神社境内)

810年頃伝教大師最澄の作と伝えられる。

38) 文殊菩薩 (参道崖上)

三苦公民館より綿津見神社への参道左側の海岸断崖上にあり。通称「お文殊さま」。



虚空蔵菩薩

39) 久野貞右衛門墓碑 (三苦生協団地海側)

40) 庚申尊碑 (字山ノ内松林中)

三苦字「山の内」の松林の中にあり、天明五己年卯月上旬(1785年)の刻書。

41) 庚申尊碑2体 (旧村営避病院跡東側)

・庚申尊 現在の「高浜2組」の南側に和白村当時、村営の避病院(隔離病舎)があった。その竹藪の中に庚申尊碑があり、天明5年(1785年)乙己初冬吉辰の刻書があったというが、現在不明。



松林内の庚申尊碑

・庚申碑 避病院の北裏手を走っていた「大砲道」に沿って、牟田口正登氏邸内にある。
 建立年月等の刻書もなく、いつの頃のものは不明。

奈多地区

42) 南無青面金剛碑 (高浜入口)

奈多高浜町の東入口にある。正徳6年(1761年)丙申6月吉日の刻書。奈多には「三ツ井と七庚申」の言い伝えがあるが、典型的な集落入口を守護される庚申様で、台座には格助、弥平、伝七、新七などの刻書がある。



牟田口正登氏邸内の庚申碑

43) 地藏堂 (高浜入口四叉路)

「高浜青面金剛」の西側四辻にある。文化3年(1738年)の地藏尊を中央にして、十一面観世音菩薩(文化7年、1816年)等3体を祀る。「糟屋郡北部第79番、新四国金花山天皇寺、十一面観世音菩薩」と書かれた札がある。



高浜入口の青面金剛碑

44) 六地藏仏 (西福寺裏墓地入口)

奈多西福寺裏山、旧墓地西南端入口にある。天明元年(1781年)頃祀られたのではないかと推定。六地藏と呼ばれているが、十仏が合祀されている。



奈多入口の地藏堂

45) 西福禅寺周辺の石仏

・おすが地蔵 (西福寺裏墓地入口)

六地藏の西隣に祀られている。「いぼ地蔵」が小瀬抜にあつた頃、栗川 栄氏の伯母の「おすがさん」が一体のお地蔵様を併せて祀っていた。昭和14年雁ノ巣飛行場拡張の折、現在地に祀られた。



西福寺裏山の六地藏仏

・いぼ地蔵 (西福寺裏山西方約50m)

石祠の中に祀られている。小瀬抜のいぼ地蔵(52)が雁ノ巣の栗川利雄邸内に移る時、一部が分祀されたものらしい。お地蔵様に供えてある円い小石で子供のイボをさすると、たちまちイボが落ちると有名で、イボが落ちるとその小石を清



おすが地蔵

めて再びお地藏様へお参りして返納したという。

・弘法大師像（いぼ地藏の東側）

笠蓑を背負い杖を手にした50cmほどの立像で、台石正面に「修業」、裏面に昭和18年5月浜崎宗之助他6、7名の名が彫られている。

・百度石（いぼ地藏の前）

表面に百度石、裏面に昭和7年6月、西戸崎 筋永...の彫書。



弘法大師像

百度石

46) 石像群八十八体（西福寺境内北端）

最古の仏像は明和2年（1765年）の刻書がある。

糟屋郡新四国千人参り80番札所。正面中央の弘法大師を祀る祠には「新四国白牛山国分寺千手観世音菩薩 明和8年（1771年）」の額が掲げられている。当初は西方の今林



西福寺境内の石像群八十八体

市三郎氏（故人）方北側にあったが大正2年3月13日の奈多の大火事で西福寺が焼失、現在地に再建されたとき東裏地（現在の平和塔前）に移された。昭和49年の西福寺改修工事に当たり、再度現在地に移された。

東から「一番釈迦如来 霊山寺」「三番釈迦像 金泉寺」「五番虚空蔵菩薩 今林伊助」などと刻書がある。



稲光宮司家前の庚申天碑

47) 庚申尊天碑（西方参道稲光邸前）

稲光宮司家前の崖の麓にあり、延亨...（1745年頃）の刻書がある。

いわゆる「奈多の七庚申」の一つで、集落西北方の守護神。

48) 六地藏仏（前方裏山中腹）

以前は前方の今林熊雄氏邸前に祀られていたが、ある時この地藏様を祀る御坊さんに「山の方へ上りたい」とお告げがあり、昭和の初年頃、父熊蔵氏が現在地に祀られたとの熊雄氏の談。紛失物の所在を教えて頂けると参る人が多かったです



前方裏山の六地藏

の事。

49) 猿田彦命碑 (前方須賀神社前)

「延享2(1745年)丑歳十月吉祥碑」の刻書。奈多七庚申の一つで前方入口の守護神。猿田彦命を祀ってあるところは、和白地区ではこの須賀神社境内だけである。

50) 志式神社境内の四仏

- ・南無青面金剛碑 正徳6年(1716年)丙申六月吉日の刻書。台座には蓮花が刻まれている。
- ・奉命庚申尊天碑 天明3年(1783年)八月吉祥日の刻書。
- ・庚申大菩薩碑 建立の年月は読みとれない。

尊天 上半分は読みとれない。正徳3年(1713年)五月吉日の刻書。志式神社野舞台西側山林中にある。



志式神社境内の四仏

51) 大乘妙典一字一石塔 (志式神社お潮井道)

玄界灘崖上左側にある。裏面に「天保10年(1839年)己亥吉祥日 海印山西福寺 当山敬誌 庄屋今林宇七 同 吉田忠治 願主今林藤右衛門 当浦氏子中...」と刻書。

大阪在住の今林藤助氏の話では、「供養塔ではなく祈願塔で、先祖の漁師の人達が海上安全と豊漁を祈り、お潮井を供えて祈祷された塔」とのこと。



大乘妙典一字一石塔

52) 雁ノ巣地蔵尊2体 (栗川利雄氏邸内)

雁ノ巣東の栗川利雄氏邸の表と裏に各一体ずつ祀られる。二体とも御神体も刻書も施されていない。

- ・表に祀られている地蔵尊

字「小瀬抜」の入口に霊験あらたかな「いぼ地蔵様」と手厚く祀られていたが、昭和14年の雁ノ巣飛行場拡張により集落の立ち退きを命ぜられ、栗川惣助氏(故人)が家とともに現在地に引き移られた。

- ・裏に祀られている地蔵様(やや長い石一体)

昭和30年頃、栗川利雄氏の借家人の某氏が、



栗川利雄氏邸内の地蔵尊

時々「風に逢う（原因不明の病気にかかる）ので御上人様に
祈禱をお願いしたところ「俺はお前が通る道端に何百年も前
から祀られていた地蔵であるが、彼の地が整地されると祀っ
てくれる者がいなくなった。世に出たい。出してくれ...」と
のお告げがあった。皆と相談の結果「センダン」の大木の根
元にあった、それらしい石を探し出し、「この御石様ですか?」
と再度お尋ねすると、「それでよか」との御答があった。そ
こで栗川家の裏口に台座をつくり、その上に安置したという。

53) 亀ヶ池・亀栖池祭祀場碑（海ノ中道旧町村境界）

雁ノ巣と志賀西戸崎との境界近くの松原の中にある。昭和
45年の建立。「古風土記」に、「打ち上げ浜の西方三十町ばか
り 松を植ゆれども打ちあぐる浪 吹き寄する砂に埋もれて
生立せず 今尚不毛の地なり この地に亀ヶ池 亀栖池あり
これ志賀大神亀を放ち玉ひし所という」とあり、この池は志
賀明神の水軍が神功皇后の招きに応じて結集し、両者が手を
結んだ地として有名で、当時はまだ海岸だったのだろう。こ
の故事により祭祀場として志賀神社から建立された由。



亀ヶ池、亀栖池祭祀場碑

西 暦	年 号	日 本 史	郷 土 史
BC200頃		水稲耕作始まる	
57		倭奴国、後漢より金印を受ける	
239		邪馬台国女王卑弥呼、魏に朝貢	
350		このころ大和朝廷の統一	
		古墳文化時代 土偶・埴輪	
360			・神宮皇后征西による三苫、八大竜王社（綿津見神社）や轡水の伝説
			・猿（えん）の塚古墳（1基）
550			
552		仏教伝来	
590			・宮の前古墳（3基） 高見古墳群（4基） 和白ゴルフ場内古墳（3基） 上和白製鉄所跡 上和白氏神・大神（おおみわ）神社
604		憲法十七条	
645	大化 二	大化の改新	
673	弘文 元	壬申の乱	
701	大宝 元	大宝律令	
710	和銅 三	平城京（奈良）遷都	
724	神亀 元		・香椎廟創建 和白郷70町歩、三苫郷70町歩
794	延暦一三	平安京（京都）遷都	
800	延暦一九		・香椎四党の一つ三苫重春、三苫に移居
805	延暦二四		・最澄（伝教大師）帰国、立花山麓に独鈷寺、三苫に般若寺建立
901	延喜 元	菅原道真、大宰府に左遷	
903	延喜 三	菅原道真 没	
939	天慶 二	平将門の乱・藤原純友の乱	
941	天慶 四		・朝廷軍小野好古、博多湾で純友軍と戦う
1167	仁安 二	平清盛、太政大臣に	
1185	養和 四	壇ノ浦の戦、平氏滅亡	・三苫般若寺建立はこのころとも
1192	建久 三	鎌倉幕府	
1274	文永一一	元寇（文永の役）	
1280	弘安 三		・聖一国師、奈多堂岸に西福寺開山
			・大友泰時、奈多から志賀へ蒙古軍追討
			三苫水道陸地化か
1281	弘安 四	元寇（弘安の役）	・立花城攻防戦
1330	元徳 二		
1333	元弘 三	鎌倉幕府滅亡	
1334	建武 元	建武の中興	
1336	建武 三		・多々良浜合戦
1339	延元 四	室町幕府	
1467	応仁 元	応仁の乱	
1543	天文一二	ポルトガル人、種子島に漂着、鉄砲伝来	
1567	永禄一〇		・和白の戦 陣造り古戦場
1568	永禄一一		・桂ヶ崎山（塩浜の裏山）での戦
1571	元亀 二		・立花道雪、立花城督（守護代の城主）となる
			・大神神社に燈明田を奉納
1573	天正 元	室町幕府滅亡	
1578	天正 六		・大友勢、耳川の戦で敗退
1579	天正 七		・立花道雪、龍造寺と和議

西 暦	年 号	日 本 史	郷 土 史
1583	天正一一	織田信長 没(本能寺の変)	
1587	天正一五	豊臣秀吉 関白に	
1592	文禄 元	朝鮮に出兵(文禄の役)	・湯谷山 薬師堂(薬師如来)
1596	慶長 元	太閤検地	
1597	慶長 二	朝鮮再征(慶長の役)	
1600	慶長 五	関ヶ原の戦い	
1602	慶長 七		・黒田長政 「三苫村から湊村」を分村
1603	慶長 八	江戸幕府	
1605	慶長一〇		・黒田長政 三苫・湊他13カ所の塩田開拓
1615	元和 元	大阪夏の陣	
1635	寛永一二	参勤交代	
1637	寛永一四	天主教徒の乱(島原)	
1639	寛永一六	鎖国令	
1647	正保 四		・龍華山明覚寺開山 一草堂再興 三苫託乗寺開山(般若寺改め)
1659	万治 二		・奈多の白浜で黒田藩石火矢役人が大砲の訓練
1660	万治 三		・黒田家家臣加藤弥左工門成昌白砂斥鹵に松植林成功
1681	天和 元		・釘ヶ浦池構築(その後5カ所の池構築)
1687	貞享 四	生類あわれみの令	
1698	元禄一一		・元禄築堤工事開始
1702	元禄一五	赤穂浪士討ち入り	
1703	元禄一六		・黒田家家臣大野忠左工門貞勝「奈多・塩浜開き」施工
			・三苫村・下和白村の海浜埋め立て、塩田開発 塩浜村誕生
1716	享保 元	享保の改革	
1783	天明 三	天明の大飢饉	
1784	天明 四		・三苫八大龍王社「風除け相撲」始まる
1789	寛政 元	寛政の改革	・高浜入口(現)の地蔵堂建立
1805	文化 二		・沖の土手破損、三苫付近まで水没
1817	文政 元		・託乗寺七世願念 死没 門徒次第に離散
1831	天保 二	天保の大飢饉	
1832	天保 三		・託乗寺 再興
1838	天保 九	天保の改革	
1843	天保一四		・四社神社境内に「若宮様」一字建立
1849	嘉永 二		・洪水・飢饉続発
1850	嘉永 三		・恩開き堤防決壊
1853	嘉永 六	ペリー来航(浦賀)	
1858	安政 五	安政の大獄	
1859	安政 六	長崎・神奈川・函館 開港	・沖の堤防大事業完了
1860	万延 元	桜田門外の変	
1862	文久 二	坂下門外の変 生麦事件	
1864	元治 元	長州征伐 英仏蘭米艦隊、下関砲撃	
1866	慶応 二		・波切不動尊
1867	慶応 三	大政奉還	
1868	明治 元	五箇条の御誓文	
1871	明治 四	廃藩置県	

西 暦	年 号	日 本 史	郷 土 史
1872	明治 五	戸籍制度	<ul style="list-style-type: none"> ・奈多村241戸1247人 ・筑前竹槍一揆 観潮小学校開設 踊舞台 下級小学校開設
1873	明治 六		
1874	明治 七	佐賀の乱	<ul style="list-style-type: none"> ・郡役所開設 郡区町村制により三苦・上和白・下和白・塩浜の四ヵ村発足
1877	明治一〇	西南戦争 西郷隆盛没	
1878	明治一一		
1882	明治一五	日本銀行設立	<ul style="list-style-type: none"> ・出来町入口に奈多駐在所開設
1885	明治一八	初代総理大臣 伊藤博文	
1887	明治二〇		<ul style="list-style-type: none"> ・神理教神功教会発足 ・奈多白浜で福岡連隊実弾射撃演習 ・観世音堂建立 ・和白高等小学校建設 ・和白村和白尋常小学校新設 ・宮下の護岸工事開始(明治42年竣工) ・塩田廃止 ・高等科を併設し和白尋常高等小学校となる ・奈多大火災 全戸中半数を焼失 ・塩浜共同風呂 ・高藤池新設 ・高藤溜池堤防決壊 ・名島発電所開設 競艇大会始まる ・筑前新宮駅開設 第1回国勢調査実施 和白村人口6,122人 ・名島水上飛行場開設 ・白川稻荷神社建立 博多湾鉄道汽船株式会社宮地嶽線開通 ・三苦消防組設立 ・箱崎宮大鳥居建立 宮地嶽線電化 ・福岡陸上飛行場(雁ノ巣)開場 ・上和白大水害 ・福岡大空襲(6月) ・和白新制中学校開校 ・和白公民館開設
1888	明治二一	市町村制施行	
1890	明治二三	第一回帝国会議 府県郡制施行	
1893	明治二六		
1894	明治二七	日清戦争	
1897	明治三〇	八幡製鉄所	
1898	明治三一	戸籍法施行	
1899	明治三二		
1900	明治三三		
1903	明治三六	日露戦争	
1904	明治三七		
1907	明治四〇	日韓併合	
1910	明治四三		
1912	明治四五		
1913	大正 二		
1914	大正 三	第一次世界大戦勃発 対独宣戦 (第一次世界大戦に参加)	
1915	大正 四		
1916	大正 五		
1919	大正 八		
1920	大正 九		
1923	大正一二	関東大震災	
1924	大正一三		
1925	大正一四		
1927	昭和 二	金融恐慌	
1928	昭和 三	普通選挙実施 張作霖爆死	
1929	昭和 四		
1931	昭和 六	満州事変	
1932	昭和 七	上海事変 満洲国成立 五・一五事件	
1936	昭和一一	二・二六事件 日中戦争	
1938	昭和一一	国家総動員法 配給制	
1939	昭和一一	国民徴用令 日独伊軍事同盟	
1941	昭和一一	太平洋戦争	
1943	昭和一一	学徒動員	
1944	昭和一一	本土空襲	
1945	昭和二〇	原子爆弾投下(広島・長崎) 無条件降伏	
1947	昭和二二	日本国憲法制定	
1948	昭和二三		

西 暦	年 号	日 本 史	郷 土 史
1951	昭和二六	サンフランシスコ講和条約	・ 託乗寺鐘楼落成
1952	昭和二七		・ 福岡カントリー倶楽部和白コース開場 和白鉱山チタニウム原鉱石採取開始
1954	昭和二九	ビキニ環礁水爆実験	・ 町政施行 和白町発足 三苫海岸護岸工事始まる 和白鉱山閉山
1955	昭和三〇		・ 福岡無線学校（現福岡工業大学）開校 和白町立幼稚園開園
1957	昭和三七		・ 明林高校（現立花高校）開校
1960	昭和三五		・ 和白町、福岡市へ合併
1964	昭和三五	東京オリンピック開催	・ 博多老人ホーム開園
1966	昭和四一		・ 畑田・黒山地区土地改良工事
1970	昭和四五	万博開催	・ 美和台・高見台団地宅地造成工事
1972	昭和四七	沖縄復帰（沖縄県発足） 日中国交 正常化 浅間山荘事件	
1973	昭和四八	第一次オイルショック	・ 朝鮮学校初等科開設
1974	昭和四九		・ 美和台小学校開校
1976	昭和五一		・ 和白東小学校開校
1978	昭和五三	第二次石油危機	・ 和白東公民館開設
1980	昭和五五		・ 和白丘中学校開校
1981	昭和五六		・ 奈多小学校開校
1989	平成元年	昭和天皇崩御	・ 京塚古墳発掘調査
1993	平成 五		・ 永浦地区区画整理事業
1995	平成 七	阪神淡路大震災 地下鉄サリン事件	・ 三苫浜土地区画整理準備組合結成
1996	平成 八		・ 三苫小学校開校
1999	平成一一		・ 三苫公民館開館
2000	平成一二		・ 三苫浜土地区画整理組合設立認可 三苫遺跡群第5次発掘調査（翌年完了）
2005	平成一七	福岡西方沖地震	・ 福岡西方沖地震 各地で被害 ・ 三苫浜土地区画整理組合解散精算承認

和白郷土史研究会のあゆみ

昭和35年（1960年）8月私たちの「ふる里」が福岡市に合併以後、昭和43年ころから、緑多き白砂青松の故郷の山野に、美和台、高美台、奈多団地と住宅の開発が進んできました。このままの姿で推移すれば、先祖の偉業や伝承の数々は消滅し忘れ去られることになるのではないかと、ということから昭和50年より岩崎三男先生、末信源蔵会長を中心に努力を重ねられ、在郷同志十数名によって昭和59年6月に和白郷土史研究会が発足しました。以来会員一人ひとり研究発表の成果を次の世代に役立つ研究集録にしようと企画されました。

昭和63年2月から「郷土の民族資料」の蒐集活動に入り、農業、漁業関係の古い器具や生活用具等約400点を蒐集、校区の老人クラブの皆さんや研究会の会員及び和白・奈多公民館の協力によって奈多愛育園跡に陳列することができました。平成6年、和白武道館の建設に伴い、二階に待望の「郷土資料室」（床面積140㎡＝42.3坪）も整備され、毎年、小学生や見学希望者の要望に応じて稲の脱穀や石臼での粉挽きなど、一昔前の暮らしを体験する貴重な学習機会を提供しています。



平成2年3月には、会員の研究結果より小冊子を刊行することとなり、以下の「ふる里のむかし」を編集発行しました。

- | | | | |
|-----|---------|------------|---------|
| 第一集 | ふるさと和白 | 「筑前竹槍一揆」 | 平成2年9月 |
| 第二集 | ふる里のむかし | 「石像物編」 | 平成4年6月 |
| 第三集 | ふる里のむかし | 「和白の塩」 | 平成5年8月 |
| 第四集 | ふる里のむかし | 「上和白村の歴史」 | 平成9年8月 |
| | | 「下和白村の歴史」 | 平成10年6月 |
| | | 「私たちのまち奈多」 | 平成11年7月 |
| | | 「三苫村の歴史」 | 平成13年3月 |
| | | 「塩浜村の歴史」 | 平成14年4月 |



和白郷土史研究会のこのような会員相互の研究成果の収録と郷土の民族資料室の蒐集活動は、平成12年度の福岡市教育委員会表彰において団体の部で表彰を受けました。受賞の功績は次のとおりです。

「多年にわたり社会教育機関団体として郷土の歴史や文化に関する調査研究及び資料収集とその活用に努められ地域文化の振興並びに青少年の健全育成に寄与された功績は顕著であります」

上述のような活動をもとに、平成15年4月より、既刊の第一集から第四集までを集大成し発刊しようという気運が高まり、会員の努力によってこの度の「ふる里のむかし わじろ」を発刊することができました。

あとがき

和白郷土史研究会では、変わり行く和白の歴史を研究し、郷土の若い人々にこれを伝承して、少しでも郷土についての意識を深めて頂き、祖先に対する感謝の心を高めるためのお役に立てばと願いながら、これまで多くの先輩諸氏の話聞き、或いは古くに伝わる古文書を求めて、学習をかさねて参りましたが、その集大成としてこれまでの研究成果を本書にまとめ発行することになりました。

研究学習を進めるなかで、諸先輩の方々にご協力を頂きましたことを厚くお礼申し上げます。

また、本書発行に対しましては各校区自治協議会の深いご理解と、多大なご支援を頂きましたこと、心から深く感謝申し上げます。

平成18年2月吉日

和白郷土史研究会一同

和白郷土史研究会会員

上和白
小金丸友吉（故人）
岩崎 三男（故人）
野口 騰（故人）
小金丸重生
小金丸美隆
安河内卯一
小金丸瑞穂
前田 幸利
仲村みどり

下和白
末信 源蔵（故人）
安河内寛行（故人）
安河内美博（故人）
小金丸種尚
山崎 泰雄
佐藤 悦路
中村 和子
安河内福雄

塩 浜
久保田俊彦
今林 秀幹

太田 武
安河内光俊
久保田永太
三 苫
堺 駿策（故人）
堺 義美（故人）
堺 廣治
堺 憲一
落石 武
堀内 繁
堺 徳昭
濱 謙次郎
堺 雅子

奈 多
今林 金伍（故人）
浜崎 重雄（故人）
今林 松美（故人）
今林 実雄
今林 武光
山本 孝
石井 秀子
末永 慶次

協 賛

和白校区自治協議会
美和台校区自治協議会
和白東校区自治協議会
奈多校区自治協議会
三苫校区自治協議会

和白郷土史
「ふる里のむかし わじろ」

平成18年2月15日

編集／発行 和白郷土史研究会

福岡市東区和白3丁目28番31号

装丁／印刷 DesignroomFD